

# 男女全面共学の技術科の記録

和光中学校 9年間の実践

森下 一期

職業訓練大学校

## はじめに

和光中学校における、技術科の男女共学の歴史は、1958年の指導要領改訂の頃より始まる。当初は時期を区切って、技術科、家庭科を均等にあつかってきた。1969年からは、「技術科」として試行することになったのである。

一貫して男女共学を実践してきたのは、義務教育段階での男女別学は教育基本法の精神に反すると考えてきているからである。さらに「技術科」の呼称をもってすすめるようになったのは、丸木政臣校長が述べているように、「いまの『家庭科』は料理や洗たく・そうじの仕方、保育など女の子を家庭に“閉じこめる”主婦教育。とくに中学校の場合、技術革新が進んでいる実社会に適さない。女子は中学2年ぐらいになると一般的に数学や自然科学を好まなくなり、機械や電気に“音痴”になってしまう。“どのような機械にも驚ろかない子を作ろう”と男女ともに『技術科』に統一し」（朝日新聞1969年「回転窓」）なければならぬだろうと考えたからである。

「技術科」として以来9年間、けっしてスムーズにすすんできたわけではない。その過程や内容は後に述べるとして、男女共学をすすめてきた、1つの結果を示しておこう。

今年度より和光高校2年生に、初めて技術教育にかんする選択科目が設けられた。普通高校に、選択科目ではあれ、技術教育の科目を設けることの意味、そこにいたる経過など、重要な問題があるが、それは、また別の場で紹介したいと思う。ここでは、その選択科目をえらんだ子どもたちについて見ていきたい。

科目名は「金属加工」であるが、次の7科目とあわせて、自由選択の1つとして設けられた。B<sub>1</sub>という、この選択科目群を選択した生徒は、高2生徒269名中213名である。科目名および選択者数は、「憲法研究」21名 「代数解析」43名

「彫塑」21名 「音楽史」16名 「国語英語」38名 「英文法」31名 「金属加工」23名 「日本史」20名、計213名である。

選択講座資料の「金属加工」の説明は、

はじめて設けられた技術教育に関する講座です。金属加工は主要生産部門の一つに位置付けられ、技術教育でも重要な分野の一つとされています。

とりあげる内容としては、第一に金属材料について、合金、炭素鋼などに関する基礎を学びます。

第二に、加工法とその実際について学んでいきます。その中でも、設備的に可能となるならば、木型の製作からとり組み、鑄造の基本を身につけたいと思います。また、工作機械による切削加工として、旋盤、ボール盤等を扱っていきます。

なお、製作の工程として、製作図の作成、測定、けがきなど重要な部分がありますが、その基本もとり扱っていきます。

というものであった（この文章は私の書いたものであるが、授業担当者は東正彦氏である。2人で協議しながら、実際のカリキュラムは、・製鉄の歴史 ・鉄をつくる ・鉄鋼材料 ・機械工作、を中心にすすめている）。

この「金属加工」を選択した生徒は、男子126名（外進92、内進34）、女子143名（外進108、内進35）のうち、選択者、男子15名（外進4、内進11）、女子8名（同2、6）であり、それぞれ（4.3%）、（32.3%）、（1.9%）、（17.1%）となる（この比率は、生徒数にたいして割りだした。B<sub>1</sub>の選択群を選択したものにたいし、この講座の選択率は、10.8%である）。

まず、23名中8名の女子が選択していることに注目できる。科目の説明に見られるように、工芸的といった要素は入れずに、技術学の基礎と技能の学習をかなりはっきりだしたものに、これだけ女子も希望をしてくているのである。なおその前に、英語、数学をはじめ芸術関係の科目をふくむ選択群から、10.8%の子どもが、真に“自由に”選択したことに、技術教育にたずさわる者としては、このうえない喜びを感じたことも正直なところである。今年卒業した和光中出身の1人の女子生徒が、“いいな、もし自分たちの時に、その講座があったら、絶対選択したのに”と語っていることも聞き、あらためて、普通高校に技術教育が設けられていないことの不自然さを感じるのである。

さて、8名の女子は、どのようなことから選択してきたか。そのうち、6名は和光中学の出身者であるが、異口同音に、中学の「技術科」でおこなった経験を述べ、そこに魅かれていることを表明している。

外部からの進学者は「中学時代、区立の中学校で、別学だった。男子のやるこ

とがうらやましかったので、高校になったら、やってみたいと思った。」と、和光中出身の子どもたちとは、逆の経験の中からえらんできている。

それらを見ると、たしかに、技術教育の位置づけをおこなってとか、あるいは将来的なことをむすびつけて選択したのではないようである。単純に“つくること”が面白い、好きだ、というところにあるようである。

まだ、初年度であるので、そう簡単に結論づけてはいけませんが、普通高校での技術教育の内容をつくりあげていけば、それは、下級生にも伝えられ、さらに発展する可能性を見ることができる。

ところで、和光中学の出身者が、受講者にしめる比率がひじょうに高いことにも気づく。中学、高校がつながっているから、といった面もあるのであろうが、技術教育という立場から見れば、少なくとも、この年度の生徒にとって、他の中学校出身者よりも、和光中学校での「技術科」の授業が生きているといっても間違いとはならないであろう（他校出身者も、技術・家庭科を学んできているのであるから）。女子についても、後に述べるように、もう技術科はごめんだという子どももいるであろうが、高校で、みずからの意志で選択するほど、関心を高めることができた生徒がかなりの比率で存在するといえる。

男女共学の技術科がどのような結果を生みだしてきたか、これまで、これといった調査をしたことはなかった。授業の感想文などでは種々なものが見られたが、今年はじめにもたれた「金属加工」が選択であったことから、これも、全面的なものではなく、ほんの一面ではあるが、女子にたいしても、技術教育への関心をもたせることが、一定程度できているのではないかと思ったしだいである。

## 和光中 男女共学「技術科」の内容

和光中学校では、すべてを男女共学でおこなっている。したがって、3年間とおして学級を単位とした授業である。

このようにすると、カリキュラムを組むにあたっては、種々な問題がでてくる。家庭科的内容をどうするか、ということが最大の問題であろう。

一方、学校全体の教育課程を検討する中で、教科時数もたびたび問題となった。HRの時間を2時間にする、隔週土曜を休日にする、それをやめて水曜日は4時間授業にするなどから、

1年3時間、2年3時間、3年3時間

1年2.5時間、2年3時間、3年2.5時間

1年2時間、2年3時間、3年3時間

といった変更があり、現行は、2、3、3となっている。

この時間数の減も教科内容を組みたてるうでは大きく影響をうける。

当初、家庭科の内容として、栄養、食品加工、繊維については必要であると考へ、栄養素の問題、添加物の問題を各10時間ほど組んでいたのであるが、全体の時間数が減になるにおよんで、他の分野の授業におされて、実施できない時期が生じた。

しかし、基本的な食品にかんする知識、加工法の理解、被服についての知識・技能がまったく欠けているという問題提起が、高校からも指摘される中で、1977年度より、3年生で、週1時間を家庭科的内容にあてることにした。もちろん、それも、男女共学でおこなっている。

他の分野は、年度により若干の違いはあるが、おおよそ、1年製図、木材加工、2年木材加工、機械、3年金属加工、電気、の配分でおこなっている（従来、栽培をおこなえずにきたが、3年の総合学習と結合して、今年度から、数百坪の畑を借りうけ、実践に踏みきっている）。技術史の内容も、機械の学習とむすびつけておこなったり、一時期は労働法にかんしてもとりあげたりした。

実習にかんしては、製図実習はもちろんとして、木材加工では、集団製作によるベンチ、机などの製作、もしくは、個人の椅子の製作をとりあげている。機械でも、時によって違うが、エンジンの分解、組立て、ミシンの整備などをおこなってきた。金属加工では、バールの製作、板金の加工、旋盤なども使ってドライバーを製作するなどである。電気では、あまりすすめないのであるが、ハンダゴテ台の製作などもとりあげてきた。すべて、男女、同一課題である。

このように、家庭科的内容をかなりコンパクトにし、技術的内容を中心にした考え方を若干整理しておこう。

まず、断っておかねばならないのは、家庭科の内容をまったく不必要と考えているのではない、ということである。さきに示したような部分は、男女ともに学習する必要があると考えるが、しかし、現行のような調理、被服製作といったものは、基本的なことを除いては、他の学習内容があるとき、第一義的には、学校でおこなわねばならないとは考えられない。現実には、むずかしい面もあるが、家庭でおこなうことによってふくらませることが望ましい部分も多くある。

さて、生産技術の基礎を男女ともに学習することについてであるが、教育における労働のはたす役割を考へても、その必要性は明確になる。その労働は、原始時代においては、真に、生活を成りたさせるためのものであったが、そこで見られるような“生活技術”は、小学校で学習する内容と考えられる。もちろん、そこにも、生産技術の萌芽が見られるのであるが、その後、社会を成りたさせてきた、消費的なものとはことなる生産技術の成立を見るのである。中学生ともなる

なら、その基礎を系統的に学ぶことは可能であり、義務教育段階としての国民的教養として、不可欠のものである。その内容は、技術学の基礎であり、生産技術の基本的な技能、さらには技術の社会的側面である。それは、いわゆる、重筋労働者の“技能”を教えるものではない。とするなら、発達段階から見ても、男女別学でなければならないという論理はでてこない。

しかし、一方に、男女の特性論がある。それも、歴史的に、また、政策的に生みだされたもの以外の何ものでもない。げんに、女子の就業率は年々高まっている。それも、パートとして低賃金でやとわれ、利用されているのである。むしろそのような状況があるからこそ、女子に、“まともな”技術教育をおこなうことが必要と考えるのである。

### 授業の中で

今回の報告ではある1時間の授業の中での女子のとり組みを示す形はとれない。この9年間の中ででてきた問題をいくつかあげ、「技術科」の男女共学の授業を考えてみたい。

「技術科」をはじめた最初の年、1つの事件がおこった。原動機の学習で古エンジンの分解をおこなっていた時、女子が1人しか授業にこないのである。（その学級は、28名で、女子は10名であった）。他の9人が授業ボイコットをしたのである。“なぜ、女子が油まみれにならなければいけないのか”“家庭科をなぜやらないのか”というのである。

それにしても、「技術科」の初年度でもあり、その重要性を信じておこなっていたことにたいし、でてきた問題はあまりにショックなものであった。しかし、子どもたちに、事前に、また授業の中でほんとうにその意味を伝えることができていたか、と考えると、教師の1人よがりの面がなかったとはいえない「技術科」の出発であった。

この時には、女子の父母にあつまってもらい、あらためて、「技術科」の構想も理解してもらおうようにした。その後も、学級親和会（PTA）で、できるだけとりあげてもらおうようにもした。

この経験は、子どもたちに教科の学習の意味をつねに正面にだしていくことの必要性を教えてくれた。もちろん、授業内容の精選はそれ以前の問題である。

しかし、女子の中に、不満がなくなったわけではない。1973年に茨城大の学生が和光中の3年生からとったアンケートに、その一部を見ることができる。

	男子	女子	合計
男女別学が良い	3 (11.5%)	4 (12.1%)	7 (11.9%)

一部男女共学が良い	16 (61.5%)	11 (33.3%)	27 (45.8%)
完全男女共学が良い	6 (23.1%)	10 (30.3%)	16 (27.1%)
わからない	1 (3.8%)	8 (24.2%)	9 (15.3%)
合計	27	33	60

他との比較などがないので、あまりはっきりしたことはいえないが、また、内容にかんして「技術科」をとりあげた明確な項目がないので、適切でないところもあるが、完全男女共学を主張する女子が、3分の1いることは注目にあたいる。

それにしても、男女別学を主張する女子が数名いること、その子どもたちに理解してもらえずに終わることはきわめて残念なことである。

その子どもたちをめぐって問題が表面化するの、やはり3年生のころである。もちろん、年度によって、問題の大小はことなり、とくに問題もなく、最後まで積極的に取り組む年もある。

3年生で、問題が表面化するの、1つには受験勉強の影響で、半身な姿勢になる子がでてくることである。これは別に女子のみでなく、男子についても同様である。第2に、女子の女性としての意識が強くなってくる。1、2年では、たんなる興味や、他の学校との比較で、不満を“女子であるから”という理由にむすびつけている感じなのだが、3年になると“女子に必要なのは”と論を組みたて、ソッポを向いていく。逆に、“女子であっても”と積極的に位置づける子どももでてくる。

もっとも、その違いは、実習においてはあまり顕著にはでてこず、機械や電気の理論的な学習の場面ではっきりでてくる。

記録をとっていないので正確な内容を再現することはできないが、男子の多くは内容についても理解を示し、技術教育の意義を理解しようとする姿勢が見られた。もっとも、つくることの面白さにとどまっている子どもも多い。

それにたいし、女子は、木材加工の実習（ベンチなどの集団製作であった）は、道具の使い方などを身につけ、良かったと述べながら、機械の歴史や機械の学習については、いくつかの意見にわかれた。1人は、むずかしくてわからない、面白くないと述べ、他は、私は面白かったという。また、“あんなことをやって何の意味があるのか。調理や被服の方がはるかに役にたつ”と主張する子どももいた。この主張をした子どもは、涙を浮かべるようにして、真に、抗議しており、私も緊張して答えねばならなかった。

この時にも、私の技術教育にたいする考え、女子にも必要とする所を、あらためて話したが、同時に、“わからない”ことにたいして謝まり、授業の改善を約

束し、カリキュラムの遅れをとりもどす努力をしていくことで理解を求めた。

さきの子どもは“どうせいってもしようがないとはわかっているけど、先生が私の気持ちを知ってくれれば、それで良い”と述べ、一応のおさまりはついたしだいである。

「技術科」を教えはじめて6年、教師経験10年で、授業に少しなれて、若干マンネリ化していた時期だけに、あらためて、授業の1時間1時間を大事にし、準備をおこなわねばならないことをイヤというほど思いしらされたできごとであった。と同時に、子どもたちに、技術教育軽視の中で、さらに一般には男女別学でおこなわれている技術科に、興味をもたせ、学ぶ意義を理解させながら、学習させていくことは、ほんとうに大変であることをしみじみと感じた。

このあと、金属加工の学習にはいったのだが、抗議をした子どもは、最後に次のような感想文を書いている。

「このことが実生活に役立つかどうかわからないけれど、非常に興味深い、また、きょうな経験だったと思います。ダレにもたよらず、自分の発想で、思ったとおりにやりぬく、金属板もおもしろかったし、旋盤を使ったり、やすりでみがいたり、ドライバーも結構おもしろかった。

技術科に対する反発は相変わらずだが、他ではやれぬ授業だったと思う。」

## おわりに

あえて、困難をかかえた場面をぬきだしたのであるが、子どもたちが生き生きと取り組んでいる場面などは、私の実践記録を見ていただきたい。

なお、「技術科」を構想するにあたっては、職場集団で議論を重ねておこなってきた。しかし、授業者として、子どもたちと正面からぶつかるのは、私であった。文中“私”と書いたのは、その意味であって、個人的に「技術科」の実践をおこなってきたのではない。

和光中学校の男女共学の「技術科」の考え方、実践が、正しいものであるか、どうか今後も検討していただきたい。しかし、現状の中で、女子に“まとも”な技術教育をおこなっていくとすると、その1時間1時間がいろいろなものとの“闘い”であると、強く思うしだいである。

「技術教育」1971年1月号（国土社）男女共学技術史の授業

「同上」1976年3月号（同）机・いすを学童保育の子どもたちへ

「生活教育」1977年9月号（草土文化）卒業旅行に「生産労働実習」